

特集

よみがえるゼナドス・ケス



国境なき海の大島コレクション 丹羽 典生

先住民が名付けた水のとおり道 ジュリー・ラーン 山内 由理子

マングローブの林をぬけて ジャシント・バラグド

埠頭のそよ風 サマンサ・フォークナー

アプリがつなく先住民コミュニティ アニック・トマシ



目次

- 1 エッセイ 千字文
文化人類学の匂い
船曳 建夫
- 特集
よみがえるゼナドス・ケス
- 2 国境なき海の大島コレクション
丹羽 典生
- 4 先住民が名付けた水のとおり道
ジュリー・ラーン
山内 由理子
- 6 マングローブの林をぬけて
ジャシント・バラグド
- 7 埠頭のそよ風
サマンサ・フォークナー
- 8 アプリがつかなく先住民コミュニティ
アニック・トマシ
- 10 みんぱく回遊
うま味からUMAMIへ
野林 厚志
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
フィールドワークの「道具」としての
ビデオカメラ
松村 圭一郎
- 16 コレクションあれこれ
海辺のくらし映像33連発!
小野 林太郎
- 18 シネ倶楽部 M
アダルトグッズ・ショップで
自分らしさを見つける
——「セールス・ガールの考現学」
島村 一平
- 20 ことばの迷い道
ひみつのウェールズ語
河西 瑛里子
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

カダール島で網漁に向かう女性たち。
女性による漁は今ではかなりめずらしい
(1979年、X0331147)

文化人類学の匂い

ふなびき たけお
船曳 建夫

かつて若気の至りで「未開」に憧れた。それで、メラネシアのマレクラという島の山奥に出かけることになった。オセアニアの「地域研究」とは、気分は無縁だった。朝、森に排泄はいちゅうに行くとい豚がやって来て、出てくるものを先に食べようと争うくらいのごとくに、足かけ三年、実質一年過ごしし、未開は満喫した。

それから三〇年ほどして大学を辞める頃、好きでヴェネチア・ビエンナーレといった催しに行くこと、インスタレーションやビデオ作品に、「文化人類学」の匂いが漂っているのに驚いた。文化人類学などは一般社会の関心とは無縁なニッチにあると思っていたからだ。作品の中には、映像作家がわざわざフィールドワークをしているかのようなものもある。

私の方は森の中に暮す人々をもの珍しく見に行つたのだが、その作品に映っているのは「フィールドワーカー」の姿である。文化人類学者が観察されているまいった。

先日も東京は森美術館で見た、どこか日本の山奥の「自然」の中に透明の亚克力板が置かれていて、作家らしい人が出てきて、その亚克力板をドーナツで丹念に拭く、というビデオ作品があり、妙に惹きつけられた。私はフィールドワークのあいだ、川と崖で一度ずつ死にかけたが、今ではそのことより、次の日曜日にホットケーキにのせて食べようとした甘いバナナを犬に先に食べられてしまった悔しさの方が、強く思い出されたりする。そのあたりがこれに関係するか。私の弟子に哲学に強いのがい

て、修士論文に「存在論的地平」という言葉を使ったのを同業者の田辺繁治たなべしげはるさんに話したら、「それはええな」と言ってもらった。確かにその後もいい仕事をしている。私は若い頃英国で社会人類学を学ぶこととなったが、本音は仏国ルソーのようなほら吹きはらぶきの驥尾きびに付して、存在論的人類学などを書いてみたい気があった。論理と語彙が足りなかった。

話は変わるが関西学院大学にいらした大島襄おおしまじょうじ先生には言葉をかけていただいたことがある。オセアニアに興味があったので、きちんとした応答ではなく、「私の父はクリスチャンで戦前の関西学院出身ですが、学生運動に熱心だったので、三〇枚ほどの卒論を書いただけで卒業した、というのがわが家の神話で、真偽は不明です」とお答えした。その後また、先生から、私の父の名前が確かに卒業生名簿にあった、とお言葉をいただいた。多分、その時もお返事は素っ気なかったかも知れない。若い人に声をかけ、目をかけなくなる年になって振り返れば、これもまた若気の至りである。

プロフィール

1948年東京生まれ。文化人類学者。1972年東京大学卒業。1982年ケンブリッジ大学にて社会人類学博士号取得。2012年東京大学定年退職、名誉教授。2020年十文字学園女子大学特別招聘教授、現在に至る。編著書に『知の技法』（東京大学出版会）、『日本人論 再考』（講談社）、『Living Field』（The University Museum, The University of Tokyo）など。

船曳建夫オフィシャルサイト <https://funabiki.com/>

よみがえるゼナドス・ケス

大島襄二は生涯を通じて200以上の島々をめぐり、独自の海洋文明論を展開した。彼にとっても特別な土地、トレス海峡の島々で残した写真記録。時を経て今、この海峡を「ゼナドス・ケス」とよぶ先住民たちにも注目されはじめている。



伝統的な追い込み漁法を実演するワイベン島の人のびと(1971年、X0330013)

国境なき海の 大島コレクション

丹羽典生 民博教授

新旧文化が混濁する島々

オーストラリアとパプアニューギニアの境界に位置する島々、トレス海峡諸島。島の住民全員に覚えてもらえるほど入り浸っていたことを自負していた大島襄二(一九二〇～二〇一四年)は、トレス海峡だけでも二〇の島に足を踏み入れた。現地語でケイラグ(「大きい島」の意味)とよばれるマシグ島で、名字をもじってジョージ・ケイラグとよばれた経験を誇らしげに語っている。実際、一九七〇年代後半に派遣された彼の調査隊は一九八八年のケンブリッジ調査隊に次ぐ、画期的な大規模調査プロジェクトをおこなった。

そもそもトレス海峡が注目されたのはその境界的な位置づけにある。東南アジアとオセアニアおよびパプアニューギニアとオーストラリアの境界に飛び石状に連なっている。さらに人びとの移動経路に当たり人の流れが盛んなため、民族的にも混濁した状況にある。本誌の一九八八年一月号の「館長対談」で大島は、

西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料
——大島襄二写真コレクション

<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/ohshima/>



アメリカ・ボストンの船乗り、アイルランドの真珠商人、フィリピンのダイバー、太平洋島嶼部の労働者たちがトレス海峡に住み着いている事実を述べたうえで、島々の世界から新旧文化が混濁するダイナミズムが読み解けることを提起した。大島の参加したトレス海峡調査隊は、こうした歴史と文化が入り組んだ場所における地誌の作成とケンブリッジ調査隊以降の社会変化に焦点を当てていた。

れていた。こうした日本人真珠潜水夫の存在は、司馬遼太郎が小説『木曜島の夜会』で取り上げたことで後に広く知られるようになった(木曜島はワイベン/サースデー島のこと)。もともと日本における海洋文化や水産業の研究を専門としていた大島にとって、海外の真珠産業の展開に関心がなかったわけがなからう。本館の「西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料データベース」には、トレス海峡における日本人移民や漁撈関係の写真も数多く収蔵されている。

トレス海峡は日本人とも無縁の場所ではない。戦前には素潜りで真珠貝採取するため日本人が大挙して集まり、日本人集落が形成さ

また調査隊が入り込んだ一九七〇年代半ばのトレス海峡は、時代的にも転換期にあった。オーストラリアの植民地であったパプアニュー

ギニアは一九七五年に独立を果たした。その当日九月一六日、大島はわざわざ足を運んでいる。独立に向けた会合においてトレス海峡のどこにオーストラリアとパプアニューギニアの国境を引くのが議論を招いたこともあった。トレス海峡が、そしてそこに住む人びとがどこに所属することになるのかは、決して自明のこと



ワイベン島に停泊中の小型の真珠貝帆船。古い潜水用ヘルメットで飾られている(1979年、X0328384)



マビアグ島からパトゥ島に移動中の船客(1976年、X0328072)



島の呼称は現地語/英語 (協力: 木村彩音)



大島襄二 (1991年、X0327426)

ではなかったのだ。なお現在のオーストラリアにおけるトレス海峡諸島民は、オーストラリア先住民の地位を与えられている。

境界のない海の理論を育んだ大島による写真コレクションを軸に、トレス海峡、日本、オーストラリアが結びついたので本特集である。

先住民が名付けた水のとおり道

ジュリー・ラーン オーストラリア国立大学 フェロー
山内 由理子 やまのちゆりこ 東京外国語大学 准教授

ゼナドス・ケスの人びと

オーストラリアとパプアニューギニアとの狭い海峡は、インド洋と太平洋が出会う場所でもある。そこには美しい岩礁と砂州をもつ島々が群れをなして広がっている。一般的にこの地域は、一六〇六年にこの海峡を航海したスペインの探検家の名にちなみ、トレス海峡とよばれている。だが、先住民の文化的指導者であった故エフライム・バニ（一九四四〜二〇〇四年）は、その植民地主義的な名を斥け、一九八九年にゼナドス・ケスと改名した。それは「南西の風 zey」「北東の風 naygay」「場 degam」そして「海岸線 thawahaw」のそれぞれの頭文字を組み合わせたゼナドス（ze-na-d-th）と、「水のとおり道」を指すケス（kes）からなる。「ふたつの国の北と南の海岸線のあいだにあるとおり道／場所」という意味だ。

ゼナドス・ケスには、先住民としてアポリジニ（アポリジナル）とトレス海峡諸島民が、一九〇〇年代にゼナドス・ケスに形成して暮らしている。その



大島襄二とマシグ島評議会副議長エルダ・モスピー氏(1975年、X0328361)

忘れられたトレス海峡研究会

大島襄二が通称「トレス海峡研究会」の一員としてこの地を最初に訪れたのは、真珠貝採取業が廃れて久しい一九七〇年代のことだった。大島らは三度にわたり長期調査をおこない、膨大な記録を残した。村や島々の一四八枚の手書き地図や七〇〇ページにおよぶ大著に加え、数多くの論文、音楽の録音記録、何千枚もの写真が伝わっている。だが、彼らの研究成果はすべて日本語であったため、ゼナドス・ケスや英語圏の学者たちのあいだでは、ほぼ忘れ去られていた。そこでわたしたちは新プロジェクト「ジャパン・ゼナドス・ケス」、略称JZKを二〇二一年に立ち上げた。

大島に学べ

JZKでは、トレス海峡研究会の学問的・社会的意義を明らかにしようとしている。そこで、大島ら調査隊の大著の英訳と出版、音楽の再録音に加え、オンライン上でその成果を語り継ぐ試みを豪日交流基金の協力をえておこなっている。また、民博が所蔵する大島調査隊の写真約二〇〇〇枚をゼナドス・ケスの人びとと共有することも目指している。



ココナツ採集(マシグ島、1981年、X0328303)

当時の調査の生々しい現場感覚を伝える大島の写真には、当時の人びとと場所についてことばを超える迫力で訴えかけるものがある。ゼナドス・ケスの人びとと写真を共有することができれば、むかしを知らない若い世代への継承の場をコミュニティ内に構築する機会となるだろう。

大島の写真は、人間関係を築いていくことが研究を成功させるために不可欠であることを思い出させてくれる。写真を見れば明らかのように、大島は他者との交流を心から楽しんで

の多くは、一九世紀から二〇世紀にかけて隆盛した真珠貝採取業のために訪れたヨーロッパ系、太平洋系、そして何千人もの日本人を含むアジア系の人びとの血も引いている。



帆走カヌーでの漁から帰ってきた人びと。男性が両手いっぱいにとれた魚をさげている(サイバイ島、X0331369)



録音中の音楽学者・畑道也。トレス海峡研究会は多くの島の歌を記録した(マシグ島、1977年、X0331123)

マングローブの林をぬけて

ジャシント・バラグド

オーストラリア国立大学リサーチオフィサー

わたしはイヤーマ島出身でクルカルガルの一人である。我々の民族は、ゼナドス・ケスのマシグ、ポルマ、メール、エルブの島々およびパプアニューギニアの西部州にかけて多く居住している。

広島まで足を運んだ日本文化人類学会での報告中、不意にわたしは感傷的になった。大島の撮ったイヤーマ島の写真を順々に見ながら、島を西側から撮った古い写真を見たときだった。それにはウマイラグ・パシスとよばれる水路が写っていた。わたしの祖父母はサミュエル・バラグド、エンマ・バラグド(旧姓マブル)という。彼らがパプアニューギニアの西部州にあるマバドゥアンからイヤーマ島へと、密生したマングローブの林をぬけて帰るときに、カヌーでとおったのが、まさにその水路であった。その写真は、先住民女性としてわたしが故郷の島とどれほど深いところにつながっているかを、改めて強く意識させたのだ。

大島の写真コレクションには、当時の家の形態や結婚式の様子、古老たちが戦った重要な政治的な戦いの場面が写し取られている。

一九七〇年代にわたしと同族の古老たちが、日々どのように暮らしていたのかを如実に伝える貴重なものなのだ。



イヤーマ島の水路、ウマイラグ・パシスの風景(1971年、X0330060)

今日の研究者たちは研究成果を調査地の人びとへ還元する重要性を説く。彼らはそうすることによって、現地社会の人びとへの敬意と、両者の双方向性、そして関係性をもつ価値を示そうとしているのだ。

我々ゼナドス・ケスの人びとにとって、写真コレクションをはじめとする大島の研究成果の還元はことさらに意義深い。それらは集団としての記憶をよび起こし、伝統と文化、そして集団のアイデンティティの支えとなるからだ。さらに言えば、若い世代には自分たちの文化とその歴史を継承する機会にもなるだろう。(ジャシント・バラグド& サマンサ・フォークナー)



新郎の親族による結婚式の行列(イヤーマ島、1977年、X0330147)

埠頭のそよ風

サマンサ・フォークナー

オーストラリア国立大学 ウェイディングフェロー

大島調査隊来訪時、わたしはまだ幼く、両親、姉妹、祖父母たちとともにワイベン島で暮らしていた。民族としてはバトゥ島、モア島、ケー

プ岬半島のウサアティおよびヤドハイガナの系譜を引いている。

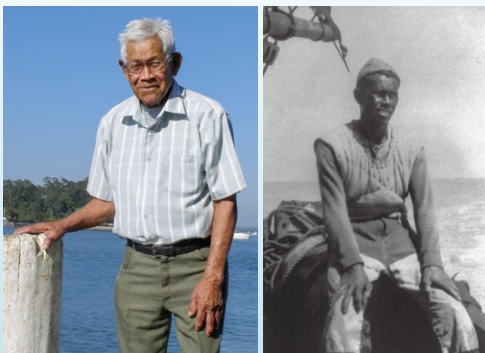
大島が撮ったワイベン島の埠頭の写真は、幼かった

ころを思い出させてくれる。海運業の労働組合員として埠頭で働いていた祖父に、スモコという軽食を母や姉妹といっしょによく届けに行ったからだ。祖父が紅茶とともにサンドイッチを食べ終えるのを、子ども同士いっそもそばで遊びながら待っていた。行くときも、戻るときも、埠頭にはいつもそよ風が吹いていた。海の香りをつけて家に帰り、眠りについたものだ。

その埠頭をどうやら大島はグラランド・ホテルから撮ったようだ。前景に遊歩道、左手および遠方に写っているのはグルパイ島。滑走路でそれとわかる。だから右手にオーストラリア本土バマガへの航路がおっている。棧橋の上をフォークリフトが何台も行き交い、埠



ボルマ島沖に停泊中のペリカン号。日本の造船技師によって造られた(1977年、X0330263)



サマンサ・フォークナーの祖父アリ・ドラモンドが真珠貝採取をしていたころ(右)と引退後(左)(提供:フォークナー家)

頭は荷を積み卸しする人と、船のドック入りでつねに活気づいていた。

大島はまた海運業にまつわる文化に強い関心を示し、船舶や漁業の風景を多く写真に残した。ペリカン号こそは、トレス海峡における真珠貝採取が一八六〇年代から一九六〇年代にかけてもたらした好景気の象徴だ。祖父アリ・ドラモンドも一九三二年から一九五一年の二〇年にわたって真珠貝採取のダイバーだった。祖父は一四歳で小型帆船ラガー・ボートの乗組員となった。潜水やベンズ(減圧症)の予防法を覚えてくれたのが、トモさんという日本人ダイバーだったそうだ。その後、祖父は調理人として、ダイバーとして経歴をかさね船長になった。



ワイベン島の埠頭(1975年、X0329736)

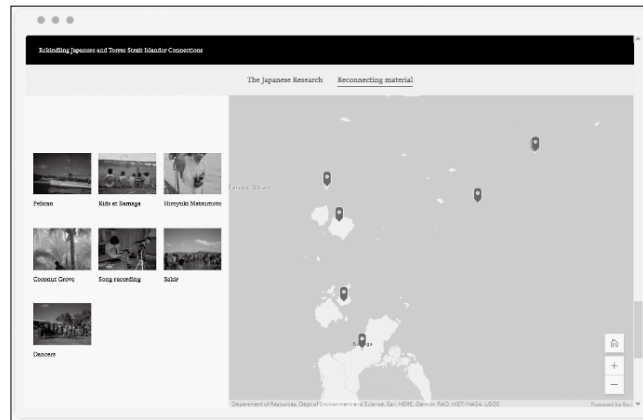
アプリがつなぐ先住民コミュニティ

アニック・トマシ

オーストラリア国立大学リサーチフェロー

今日のデジタル技術の革命的進歩は新しい創造の世界を開いている。先住民の言語復興、文化伝統の記録、拡散した先住民同士の世代を超えた知識の共有をデジタル技術が支えているのだ。先住民が自らのことばで自分たちの物語を語るのに便利なアプリも開発されている。わたしたちが進めている大島コレクションのオンライン公開の試みも、ゼナドスケスの人びとと、その歴史に対するより深い理解を促すはずだ。

ArcGIS StoryMapsというアプリがある。このアプリを用いれば、地図、テキスト、音声、動画を組み合わせ、大島調査隊とゼナドスケスについての情報をまとめることができる。それによって調査隊が記録した話や写真、音楽、ゼナドスケスの長老による当時の証言を保存することが可能だ。加えて、多様な世代の多様な人びとに多様



プロジェクトで用いているArcGIS StoryMaps

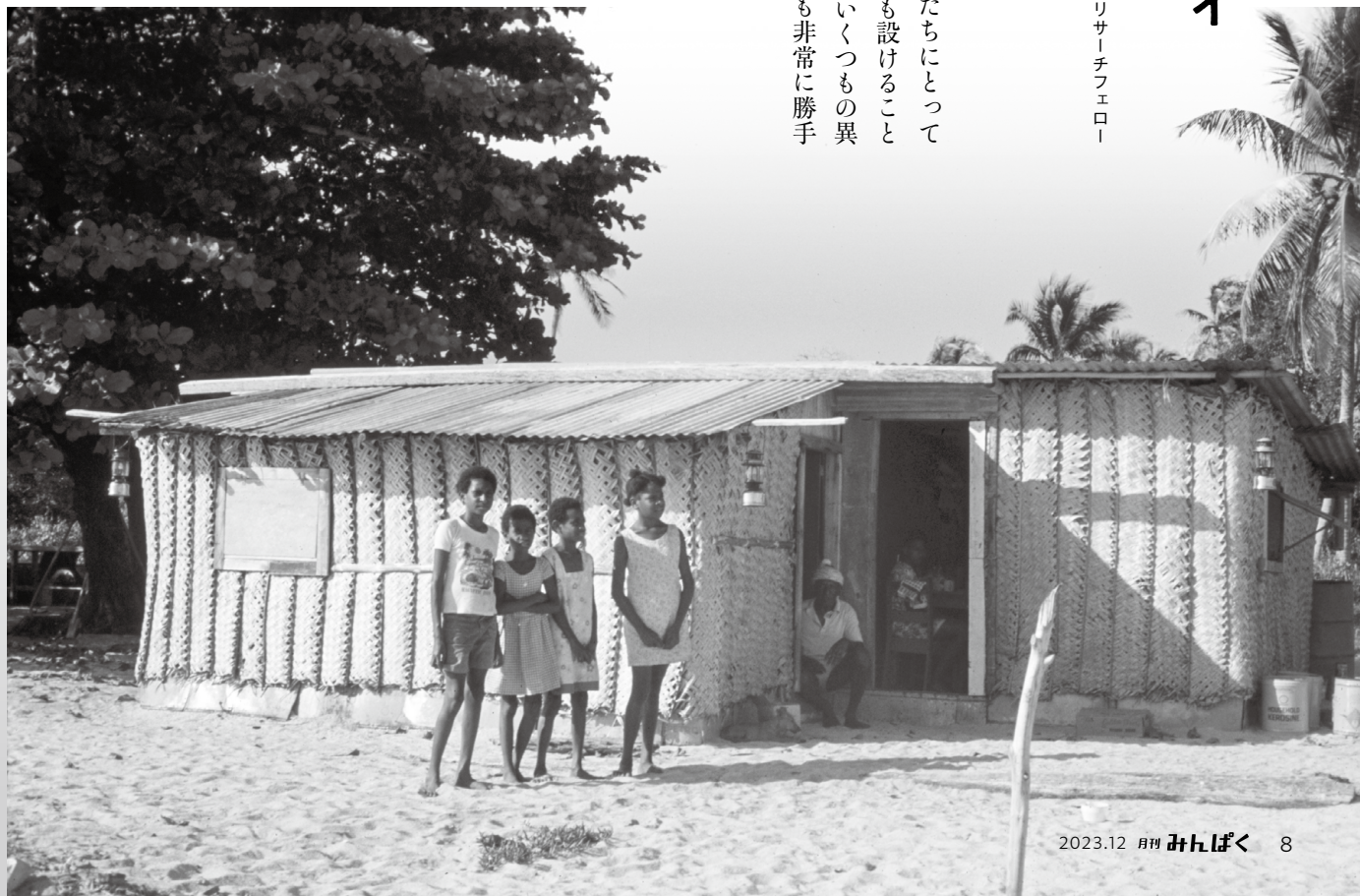
なメッセージを発信し、先住民たちにとっての調査資料の意義を語り合う場も設けることができる。さらにこのアプリは、いくつもの異なるストーリーをまとめるのにも非常に勝手がよい。

ゼナドスケスの文化復興プロジェクトにはこんな目的がある。まず、デジタルでの資料返還によって人びとの記憶、先住民の建築、漁業技術、環境に関する知識、トーテム(人びとが特定の動植物やそのシンボルと霊的に結びついているという信仰)をめぐる慣習、むかしの遊び、物

語を精緻に再現する。また大島調査隊が記録した環境に関する知識と写真から、この地域における気候変動の影響を理解する。さらに、今後二年かけて先住民コミュニティでフィールドワークをおこない、彼らと大島たちとの交流や写真コレクションをめぐる逸話、思い



大島襄二の見たマング島北海岸と、その現在(上:1975年、X0329756、下:2010年)



右頁:ゼナドスケスの家。壁はココナツの葉を織り込んで作り、屋根はトタン葺き(マング島、1975年、X0329759)



小型ボートのレース当日(マング島、1977年、X0329810)

出を記録する。これらを紹介するゼナドスケス、キャンベラ、そして日本で開催予定の展示は新しいつながりを生むだろう。
わたしたちはゼナドスケスの関係各所や人びとの助けを借りながら、コミュニティに寄り添う形でプロジェクトを進めていきたいと考えている。オンラインでの資料公開は、間違った形で使用される危険性と背中合わせである。そのため、ゼナドスケス、オーストラリア、日本の三者が継続的かつ真摯に連携しながら、正確な記録をとり、コレクションをそれぞれに適切な方法で管理することが重要だ。

味の新参者

「空腹は最高のごちそう」ということばをときどき耳にするが、食事の支度をすることによってあまり気持ちのいいものではない。腹が減っていればよいのであれば、うまいものを作ろうなんて努力は必要ない。このことは、もともとは「空腹は最高のソース」だともいわれている。空腹であればなおさら食事がおいしくなるという加点評価なのだろう。

味の好みはさまざまな要因が複雑にからみあう。味覚、香り、口当たり、個人の経験あたりが、味の好みを説明するうえでわかりやすい。味覚に基づく味の好みは生理学的で、基本的には舌で感じることでできる五味（甘味、酸味、塩味、苦味、うま味）が存在する。人間はエネルギー源に由来する甘味や身体をかたちづくるために必要な必須アミノ酸に由来するうま味を好み、毒素につきものの苦味や腐敗したものが出す酸味を避ける傾向がある。塩味は体調や喉の渇き具合によって感じかたが変わる。

基本五味のうち、うま味は二〇〇〇年にその受容のメカニズムが発見された新参者である。とはいえ、人間はいかにうま味を食べ物に組み込んでいくかという工夫を続けてきた。それは食文化のところどころにあらわれてくる。

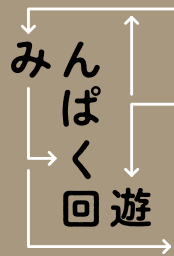


ビデオテーク「タイの塩辛と魚醤油(さかなしよ うゆ)」(番組番号1230)

グルタミン酸調味料の発明

一方で、なんでもかんでも「うま〜」しようという欲望はうま味を物質にさえしてしまつた。日本人によるグルタミン酸調味料の発明である。日本では古くから昆布を料理に使う習慣があり、その出汁がうまいことを経験的に知っていた。明治時代になり、近代科学をとりこんだ日本では、それまで感覚的、経験的にもついていたうま味の知識を活かし、グルタミン酸を天然の食材から抽出し目に見えるかたちにした。一九〇八年のことである。

日本で生まれた味の発明品は、料理に使う調味料としてだけではなく、加工食品に欠かせないものとして世界で用いられるようになっていく。また、それまでに存在した四つの味に対して、あらたに日本で発見された味は翻訳に相当する語がなく、現在、UMAMIということばがうま味をあらわす



うま味から

UMAMI

野林厚志 民博教授



A 石蒸し焼き地炉の再現展示(サモア)

オセアニア展示 「島での暮らし」

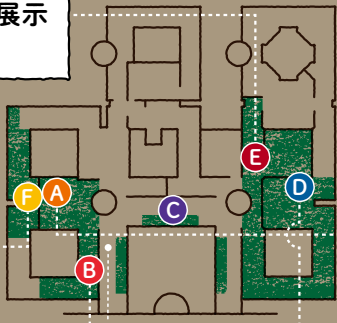
B 南米アンデス高地を原産とするトマト



アメリカ展示 「食べる」

本館展示場

朝鮮半島の文化展示 「食の文化」



観覧券売場

アフリカ展示 「都市に集う」



F グルタミン酸調味料は世界中の加工食品に使われている(ガーナ、H0205092)

日本の文化展示 「祭りと芸能」



E うま味調味料の缶 (韓国、左 H0275483、右 H0275482)



UMAMIがうま味をあらわす共通語として世界で用いられている(撮影:クリストファー・マキュー、イギリス、2023年)

H、Oからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

「うま〜」食べたい

オセアニアでは、主食のイモ類、パンノキの実、バナナなどのデンプンたっぷりの食材とブタ、ニワトリ、魚などのタンパク質の源を、地面を掘って作る地炉で石蒸し焼きにする。デンプンのままでは味が引き出せないところを、他の食べ物のなかにあるうま味をめぐりあわせて調理法の発明といつてよい。

うま味を含む食べものを他の食材にあわせる工夫は、調味料としてのうま味の役割を強くさせることにもなっていく。

うま味の成分が野菜のなかですば抜けて多いのはトマトである。南米アンデス高地を原産とするトマトは、コロンブス以降、旧大陸にもち込まれ世界中に広がった。水分も豊富に含むトマトは乾燥した地域では重宝される野菜であるが、年がら年中収穫できるわけではない。そこで、その土地の環境ならではの工夫が乾燥であった。トマトを乾燥させると成分が凝縮される。乾燥地帯でうまい料理を年中作るための天然調味料の発明である。

もともと、身近にうま味を含んだ食品があった地域でも、うま味を気軽に使うための調味料が発明されてきた。東南アジアの魚介類を原料とする魚醤や大豆や米などの穀醬である。これらの調味料が使われている地域は「うま味の文化圏」とよばれることもある。



D 正月棚(埼玉県、O0003814) 縁起のよい昆布が中央に吊るされている。お正月に飾られたあと出汁を取り、切って食べることが多い

共通語として世界で用いられている。

もともと、現在のグルタミン酸調味料はグルタミン酸をほとんど含まないサトウキビを原料にしている。サトウキビの糖蜜に発酵菌を加え、アミノ酸を生成させてその中からグルタミン酸を抽出する。昆布やトマト、魚といったうま味成分をもともと含む食品から作るとコストが高くつくからである。グルタミン酸調味料で味わうUMAMIと、昆布やトマトから引き出されるうま味は同じものか、異なるものか。空腹だったらわからないような気もする。



イベント予約はこちら
みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event>
各イベントについて、
詳しくは本館ホームページをご覧ください。

特別展

「交感する神と人
— ヒンドゥー神像の世界」
会期 12月5日(火)まで
会場 特別展示館

mingidj(2018年)

解説 諸昭喜(本館助教)
司会 菅瀬晶子(本館准教授)
参加費 要展示観覧券
(イベント参加費は不要)

企画展

「カナダ北西海岸先住民の
アート—スクリーン版画の世界」
会期 12月12日(火)まで
会場 本館企画展示場

みんなく映画会

「みんなくワールドシネマ
「はちどり」」
ソウルに暮らす14歳の少女ウニ。空虚
な思いを抱えていた彼女の心の成長を、
塾の新任教師ヨンジとの交流を軸に、
繊細に描き出します。
日時 2024年1月27日(土)13時
30分〜16時30分(13時開場)
会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員350名)
上映作品 『ハルセ』/House of Hum-

友の会先行受付

12月11日(月)〜15日(金)定員80名
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
一般受付 12月18日(月)〜
2024年1月19日(金)

みんなく映像民族誌シアター

本館製作のDVD「みんなく映像民
族誌」シリーズから4つの作品を上映
し、監修者らを迎えたトークをおこな

います。オンラインでもご参加いた
できます。
参加形式
①会場参加 シアターセブン(大阪・
十三)(各回定員55名)
②オンラインライブ配信(参加各回
定員100名)
※館外での開催です。ご注意ください。
※事前申込制(本人を含む2名まで)、
先着順、参加無料
【津軽のカミサマ】
日時 2024年1月13日(土)
13時30分〜16時(13時開場)
解説 大森康宏(本館名誉教授)
司会 黒田賢治(本館助教)

友の会先行受付

12月4日(月)〜8日(金)
定員10名 会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
一般受付 12月11日(月)〜
2024年1月5日(金)

友の会先行受付

12月11日(月)〜15日(金)
定員10名 会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
一般受付 12月18日(月)〜
2024年1月12日(金)

友の会先行受付

12月11日(月)〜15日(金)
定員10名 会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
一般受付 12月18日(月)〜
2024年1月12日(金)

みんなくウィークエンド・
サロン— 研究者と話そう

本館の研究者が「みんなくの展示資料」「調
査している地域(国)の最新情報」「現在取り
組んでいる研究」についてわかりやすくお話
しします。
会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(イベント参加
費は不要)

オーストラリア先住民のアート

話者 平野智佳子(本館 助教)
12月10日(日)14時30分〜15時30分
探して、掘って、読み解く
— ペルー海岸部に
古代帝国の痕跡を求めて
話者 松本雄一(本館 准教授)

聖地パレスチナのクリスマス

話者 菅瀬晶子(本館 准教授)

講師 園田直子(本館 教授)
博物館の舞台裏では、来館者にとっては安
全で観覧しやすい、資料にとっては適切な
展示・収蔵環境になるよう、さまざまな予防
保存の活動がおこなわれています。ひとに、
モノに、環境に「やさしい」資料の保存につ
いて考えます。

【申込期間】

■友の会先行予約
12月11日(月)〜15日(金)(定員80名)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)

■一般受付

12月18日(月)〜2024年1月17日(水)



外から見ることのできる収蔵庫
(撮影:末森薫、2018年)

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名
※事前申込制、先着順、参加無料
※当日参加受付あり(定員80名)

第540回
12月16日(土)13時30分〜15時(13時開場)
「友よ、水になれ」—メディア化時代
における身体知のゆくえ

講師 相島葉月(本館 准教授)
ブルース・リーのカンフー映画が世界的な空
手ブームを巻き起こしてから半世紀が経ちま
した。エジプト人空手家とのオンライン/オ
フラインの対話より、真に美しく強い身体に
ついて探求します。

【申込期間】
■一般受付 12月13日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。

第541回
2024年1月20日(土)
13時30分〜15時(13時開場)
博物館の舞台裏
— 資料の保存を考える

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時〜17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>

友の会
お申込みは友の会ホームページ内の受付
フォームをご利用ください。

友の会講演会
参加形式
①本館第5セミナー室(定員90名)
②オンライン
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

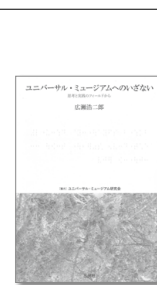
お問い合わせ
国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時〜17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



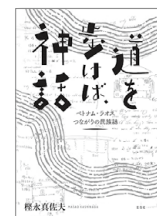
ワークショップ
年末年始イベント
「HAPPY 龍 YEAR!
@みんなく」
ワークショップ「アクティビティカード」
とマップをつかつて、展示場にいる
2024年の干支「龍(辰)」を探しま
す。アンケート回答者には参加賞を
贈呈します。
日時 12月23日(土)、2024年
1月6日(土)、7日(日)10時
17時(16時受付終了、配布予
定数がなくなり次第終了)
受付場所 本館1階エントランスホール
会場 本館展示場
※当日随時受付、各日先着120名
要展示観覧券(イベント参加費は不要)

九州山地の焼畑文化」
会期 12月3日(日)まで
会場 ヒストリアテラス五木谷
(五木村歴史文化交流館)
(熊本県五木村)
主催 ヒストリアテラス五木谷
国立民族学博物館
13日(土)12時〜15時30分
(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

刊行物紹介
■広瀬浩二郎 著
『ユニバーサル・ミュージアムへの
いざない
— 思考と実践のフィールドから』
三元社 2,860円(税込)
近年、各地の博物館で「さわる鑑賞プロ
グラム」が実施されている。それは、博物館
を「全身の感覚でみる」体験の場に変えてい
く試みでもある。ユニバーサル・ミュージ
アムを創ることで共生社会の未来像を提示
できるだろう。



■櫻永真佐夫 著
『道を歩けば、神話
— ベトナム・ラオス つながりの民族誌』
左右社 2,750円(税込)
ベトナムのハノイからラオスのルアンナム
ターまで、民族の「はじまり」の伝承地をめ
ぐる旅行記。民族雑居地域における歴史・
社会・文化を、四半世紀におよぶ現地調査
の経験から語る。



フィールドワークの「道具」としてのビデオカメラ

松村圭一郎
岡山大学准教授

村にカメラをもっていく

人類学のフィールドワークでは、「カメラ」は欠かせない道具のひとつだ。一九九八年にエチオピア西南部のコーヒー栽培が盛んな農村でフィールドワークをはじめた当時、投影機で映す「スライド写真」をつくるために、一眼レフのフィルムカメラと大量のポジフィルムをもっていた。パソコンの映像や資料を簡単にプロジェクターでスクリーンに映せる今となっては、もはや過去の遺物だ。ポジフィルムはエチオピアでは現像できない。村人のために撮った写真は、別途、ネガフィルムで撮影して街の写真屋で現像していた。

最初にデジタルカメラをエチオピアに持参したのは、二〇〇六年だ。それまでのフィルムカメラは電池式で、滞在中、ほとんど電池交換をしなくてもよ



エチオピアで最初に村人にビデオカメラを向けたとき



最初は日常の生活の様子を映像に撮り、村人にも見せていた



カメラの前で歌ってみせる子どもたちを家族も液晶モニター越しに見る



見送りの親族や友人たちとともに荷造りをする、海外出稼ぎに行く女性



親族や友人と別れのあいさつを交わす女性。中東で家政婦として働く

称して何をしているのか、まったく把握できなかった。

ビデオカメラで撮影された映像は、すぐにその場で共有できる。さらに編集した映像をノートパソコンで見れば、こちらの意図や関心について、ことばを介さずとも理解してもらえらる。フィールドワークにおけるビデオカメラは、文字どおり、調査者と現地の人をつなぐ「メディア」としての役割があったのだ。

二〇〇八年三月、二週間ほど調査村に滞在していたとき、村では突然、女性たちが家政婦として中東沿岸諸国に出稼ぎに行くようになった。家族の生活を助けるために、という女性が多かった。だが村で農民男性と結婚する以外

かった。ところが、デジカメだと頻繁にバッテリーを充電する必要がある。村の滞在先の農家によく電気がおと



季節は長い乾季の終わり。男性たちはモスクに集まり、雨乞いの祈禱をしていた

て使用可能になった。村にノートパソコンをもっていけるようになったのも、そのころからだ。大量の電気を消費するデジタル・ビデオカメラだと、さらにバッテリーの充電が重要になる。停電が多く、電気の供給が不安定なエチオピアのような国では、そもそもデジタル機器を使うこと自体のハードルが高い。

「調査者」は何を見ているのか？

二〇〇八年三月にはじめて村にビデオカメラを持参した。民族誌映画をつくる映像人類学に興味があったわけではない。それまでの調査が一段落つき、これからエチオピアで何をすればいいのか、模索しているタイミングだった。村で撮影をはじめると、人びとから思わぬ反応があった。ビデオだと、その場ですぐに、撮影した映像を相手に



エチオピアの村で動画撮影してみました

村人もおもしろがってビデオカメラをもち、筆者を撮影する(写真はいずれも撮影映像より。2008年)

見せることができる。人びとは、わたしが何を撮り、どう記録しようとしているのか、一目瞭然とわかる。調査者が見ているものも、そこに映し出される自分たちの姿も、同時に「見えてしまう」のだ。それまで現地の人は、わたしがフィールドノートに何をメモし、何をカメラで撮影しているのか、確認できなかった。それらの記録をもとにわたしが英語や日本語で論文などを書いて、彼らは読めない。人びとはわたしが「調査」と

「日本の人に伝えてほしい」

このとき撮った映像は、その後、「マツガビット——雨を待つ季節」という短編作品になった。村を訪れ、編集した映像をみんなに見せると、人びとから「おまえは、やっとちゃんとした仕事をしたな」と言われた。博士論文をもとに日本語で出版した書籍はすでに渡していた。だが、その本は壁に吊るされたまま開かれることはなかった。映像に映し出されている自分たちの姿を見て、彼らはこういうことをわたしが日本の大学生や市民に伝えるために研究をしている、とはじめて理解できたようだった。村でお世

話になってきた農民男性にカメラを向けると、「自分たちのことをちゃんと日本の人に伝えてくれ」と言ってくれた。日本で学生などにエチオピアの村で撮った映像を見せる。すると、さらに予想外の反応がある。出稼ぎなどのテーマよりも、遠く離れた異国で生活する人びとの姿そのものに興味を引かれるようだった。見る人によって映像のどこに注目するのは違う。わたしにとってはあたりまえだったことが不思議だと思われることもある。そこから対話が生まれる。映像は、相手を説得するための資料やデータとは異なる、コミュニケーションを引き出す「道具」なのだ。



海辺のくらし映像 33連発!

おのりんたろう
小野 林太郎 民博 准教授



「トビウオのすくい網漁」より。松明に向かって飛び込んでくるトビウオを網で捕獲する。トビウオは撮影用のカメラライトにも飛び込んできて、撮影も漁も大変だった(制作:海工房、イファルク環礁、2008年)

東南アジア・オセアニア——海辺のくらしと物質文化データベース

資料点数: 約3000点+33本の映像あり
東南アジアとオセアニアで収集された海辺や水辺といった水域環境のくらしに関連する標本資料の基本情報とその関連情報(写真・映像・文献資料など)をデータベース化したもの。これらはフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「海域アジアにおける人間の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」(研究代表: 小野林太郎)の成果で、誰でも自由に閲覧可能だ。
<https://ifm.minpaku.ac.jp/maritime/>



データベース



神像付き椅子
(東セビック州、H0164883)

家船用櫂(ボルネオ島、H0198284)

貝斧(マイクロネシア[推定]、H0098387)

トビウオすくい漁用 たも網
(ヤップ島、H0010133)

みんなのユーチューブ?

YouTubeをはじめとする無料動画が全盛期のこの時代、巷にはじつに多様な映像があふれている。そんな時代に先駆けて、みんなはくは一九八〇年代からビデオテークなどの映像資料の充実化に取り組んできた。例えば、みんなはく公式ホームページに入ると、「図書館・データベース」という項目がある。ここをクリックすると、

みんなの標本資料や映像・音響資料を検索できるさまざまなデータベースがあらわれる。ここでは先のビデオテークをはじめ、みんなはくが所蔵する多彩な映像資料のリストが目白押しだ。

しかし、残念ながら著作権の関係などもあり、これらの映像資料をネット上で視聴することはできない。そこで誰もが視聴できる映像も提供するデータベースを、という思いで手掛けたのが「海辺のくらしと物質文化データベース」だ。



「東南アジア・オセアニア——海辺のくらしと物質文化データベース」のトップページ

このデータベースでは現在、東南アジアやオセアニアの海辺にくらす人びとの貴重映像三三本が見たい放題なのである!

スキマ時間にショート動画

映像の説明をする前に、この三三本にたどりつくアクセス方法について紹介しておきたい。

PCなどの端末からアクセスする場合には、検索サイトで「海辺のくらしと物質文化データベース」と検索すれば簡単に本データベースに



関連動画

たどり着くことができる。なお、みんなはく公式ホームページのトップページからたどり着くのはなかなかの「茨の道」なのでお勧めしない。データベースの言語は日本語と英語の二言語が選択可能で、約三〇〇〇点の関連標本をテーマや地域別に検索できるようになっている。このトップページの一番右側にある「関連動画」をクリックすると、ついに三三本の映像のサムネイルがあらわれる。なお、スマホからであればもっと簡単に、小見出しすぐ側にある二次元コードを読み取っていただければ「関連動画」のページまで一気にアクセスできる。

「関連動画」とあるように、これらの映像は基本的にデータベースに含まれる標本資料の実際の利用法だったり、製作法だったりを紹介する民族誌映像でもある。これらの映像は、世界各地における海のくらしを撮り続けてきた映像制作会社「海工房」によるものだ。一本の動画が一〜二分程にまとめられているので、スキマ時間にも視聴しやすい。

ガラガラでサメ 闇に舞うトビウオ

正直、三三本のどれもおすすめめの映像ではあるが、今回は特に二本の映像を紹介したい。一つは「ガラガラを使ったサメ釣り漁」の映像。ガラガラとは、ココヤシの殻が素材のガラガラという音が出る道具のことである。サメは音に敏感なので、その習性を逆手に利用しておびき寄せ、テグスと釣り針だけで体長二メートル強のサメをたったの一人で釣りあげてしまう。オ

セアニアではよく見かける光景でもあるが、この何気ないシーンに人びとの知恵と工夫を垣間見ることができたらう。

もう一つは「トビウオのすくい網漁」の映像。空飛ぶ魚、トビウオなら蝶のように網でも捕れそうな気はするが、まさか本当にやっている人たちがいるとはという驚きの映像である。ここでもトビウオが光源に飛び込むという習性を巧みに利用している。まずカヌー上で松明を掲げ、そこに飛び込んでくるトビウオを触先にて仁王立ちの若者が気合で捕獲するという荒業である。この漁もオセアニアでは、各地で確認されている一般的な漁のひとつだ。夜漁ということ、撮影にはカメラライトが必須となるが、トビウオがライトに大興奮してしまい撮影も漁そのものも大変だったようだ。驚きの映像はそんな苦労の結果でもある。

その他の映像も、海辺にくらししてきた人びとの知恵や経験を十分に感じられる魅力的な内容になっている。また、そこで登場する道具類の多くは、みんなはくの東南アジア展示場「生業」セクションやオセアニア展示場「海での暮らし」セクションで観てもらうことが可能である。まずは一度、海辺のくらし映像をYouTubeの合間にでも見てもらいたい。そしてさらに関心をもった方は、ぜひみんなはくにご来館ください!



サメ捕り用 音鳴らし具(ウボル島、H0004867)

「ガラガラを使ったサメ釣り漁」より。ガラガラの音でおびき寄せ、カツオを餌にテグスと釣り針で釣りあげ、棍棒で気絶させてサメをとらえる(制作:海工房、オワリキ島、2012年)



アダルトグッズ・ショップで 自分らしさを見つける

島村 一平 民博教授

モンゴルの大人のオモチャ屋？

モンゴルといえば、大草原、遊牧民、チンギス・ハーン。われわれは、この三点セットを条件反的にイメージしてしまいがちだ。しかし本作の舞台は、大都会ウランバートル。それも半地下の怪しげな大人のオモチャを扱うアダルトグッズ・ショップだ。くわえて主人公は、大学で原子力工学を専攻する女子大生。設定からしてステレオタイプなモンゴル像を何重にも裏切ってくれる。それが本作だ。

「セールス・ガール」とは、主人公がアダルトグッズ・ショップの店員になるというストーリーから来ている。とはいえ本作は、いわゆるアダルト映画ではない。奇抜な設定とは裏腹に若い女性の心の成長やシスターフッド——つまり女同士の友情がテーマの歴とした芸術作品である。社会主義が崩壊して三〇年。大草原の牧歌的なイメージに反して急激な都市化が進んでいる。首都の人口は一六〇万人

を超えた。拡大する貧富の差に高い失業率。家族の絆の強い遊牧民の暮らしも今はむかし、首都の人間関係は東京さながらに希薄化している。若者の自殺も大きな社会問題となっている。

大人たちの滑稽な「性」態

そんなウランバートルで暮らす主人公サロールは、地味で真面目な女子大生だ。本当は絵を描いて生きていきたいと思っている。しかし親に逆らえず、退屈な大学に通う鬱屈とした日々を送っていた。物語は、そのサロールが怪我をした友人の代わりに「セックス・ショップ」で働くはめになることから始まる。このショップが開店するのは夜だ。日が沈み、街にネオンサインが輝き出すころ、さまざまな大人たちが店に姿を見せ始める。「友人へのプレゼントなのよ」と言いながら、嬉々とした表情で大人のオモチャの品定めをする中年女性。顔を隠してバイアグラをそそくさと買い求める男性。そ



「セールス・ガールの考現学」
販売元：アルパトロス

して主人公が通う大学の仏頂面の女性教授までもが……。サロールは、フィールドワークしながら、大人たちの滑稽な「性」をめぐる「生感」を観察していくのである。

年の離れた親友

この物語の鍵となるのは、店のオーナーである謎の中年女性、カティア（カーチャと転写する方が一般的）との出逢いだ。店番が終わると、サロールはカティアの住む郊外の豪邸に売り上げを持って行く毎日。有閑マダムのような風情のカティアは、地味な女子大生サロールにさまざまなアドバイスをはじめなのだ。それが結構な名言／迷言なのである。「眉毛ボーボーはイカさない。ちゃんとお手入れなさい」「親の言いなりになるなんてナンセンス」「ぼんやりしないで。うつむいて自分の靴を眺めているあいだに大切な時間は過ぎていくわ」。

カティアはじつは、ソ連に留学経験のある有名な元バレリーナだった。欧米文化に詳しくロシア語を流暢に話し、奔放な一人暮らしを送る。そんな妙齢の女性を演じるのは、往年の名女優エンフトールである。このカティアとの交流を通じて、サロールは外面的にも内面的にも少しずつ変わっていく。この物語に深みを加えているのは、成長が双方向だということだ。カティ

アも孫ほど年の違うサロールとの交流を通じて、自由恋愛を称揚する一方で古いソジニック（女性蔑視的）な考えをもっていることや自分の幼さに気づいていく。

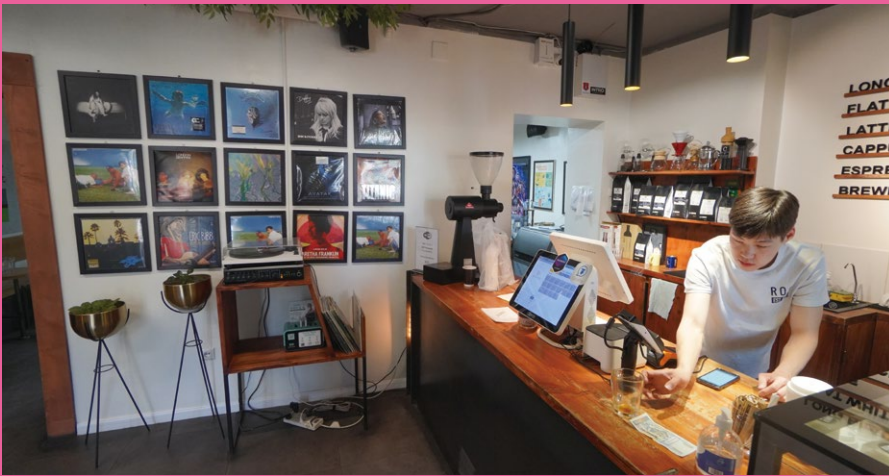
不吉な流れ星

この作品には、モンゴル文化ならではの象徴的な表現や社会背景が随所にちりばめられている。ひとつ例を挙げよう。油絵が趣味のサロールが描く都市の夜景に尾を引いて流れる星たち。一見、ロマンチックに見えるが、じつはモンゴルでは流れ星は、「誰かの死」を意味する。願い事をするなんでもつてのほか。むしろ「ペッペツ、これは自分の星じゃない」と唾を吐きながらまじないことばを唱える習俗があるくらいだ。

流れ星の下に描かれているのは死体。実際、彼女は自分の部屋から飛び降り自殺を目撃している。ちなみにモンゴルの自殺率は、一〇万人当たり一八人（二〇一九年、日本は二人）。何とモンゴルの一三〜一八歳の若者の三分の一が自殺未遂の経験があるとの調査データもある。孤独と将来への不安が大きな要因だといわれている。そんな彼女の孤独や死への不安がカティアとの出逢いを経てどのように生性へと転換していったのかは、本作を観てのお楽しみだ。



上：ハンオールの高層マンション（2019年）
下：ウランバートル中心部の高層ビル街の夜景（2023年）



ウランバートルのカフェ。レコードを聴くのが流行っている（2023年）

右：ウランバートルの韓国料理の屋台。映画にも出てくるが、韓国文化はモンゴルの若者たちの憧れだ（2023年）

左：街の古着屋に集う若者たち（2023年）



（写真の撮影場所はすべてウランバートル）

ひみつのウェールズ語

かわにし えり こ
河西 瑛里子
民博 助教

「Diolchだよ、diolch!」友人が耳元でささやく。そうだった。

「ディオーホ……」綴りから発音が想像しにくいウェールズ語。練習の成果を試そうと恐るおそる口にしてみたら、彼女のお父さんは、おや、わたしの母語を知っているね、とでもいうような表情の後、にっこりと笑って言ってくれた。

「Diolch, diolch!」こちらこそ、ありがとう、diolch!

ウェールズというのは、「イギリス」を構成する国のひとつだ。イギリスの正式名称は、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国。ウェールズその他、イングランド、スコットランド、北アイルランドから成る。グレートブリテン島の西部に位置するウェールズは、他の2カ国より早くイングランドの統治下に入ったためか、名前を聞く機会が少ない。とはいっても、ラグビーワールドカップの常連国。スタジオジブリの映画「天空の城ラピュタ」の参考になった地域でもある。

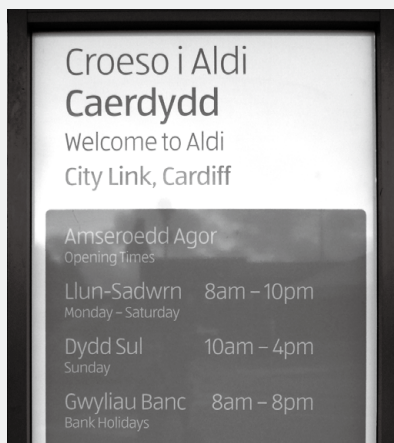
ウェールズ語はインド・ヨーロッパ語族に含まれるが、英語の一方言ではなく、ヨーロッパに広く暮らしていたケルトの人びとのことば、ケルト語派に属する。話者が減少した時期もあったが、学校で教えていることもあってか、存続している。公共の案内やスーパーマーケットの店内外の表示などにも、英語との2カ国語表記が見られる。ウェールズの大学にはウェールズ語だけの授業があり、公共放送BBCにはウェールズ語の番組もある。

ただし友人が暮らすウェールズ南部では、ウェールズ語を街中で耳にする機会は稀。しかし北西部、とりわけアングルシーは、現在でも

日常的に使用されている地域として、よく名前が挙がる。一度、訪れたとき、路線バスのなかで運転手と乗客が、確かにウェールズ語（と思われることば）で話をしていた。そこに、アイスレッドフードというウェールズ文化の祭典を見に行ったのだが、会場にはウェールズ語のみのメニューしかないカフェもあり、驚いた。

今ではウェールズ語しか話せないという人はほばいない。友人の父親も「学校に入ってから英語だったから、今では英語の方が得意だけどね」と言う。知らなくても困らなそう。しかし、友人曰く、「内緒話をするとときに、便利だよ」。

ウェールズでは当たり前のようにあるのに、一歩外に出たら、イギリス国内でも、隠れているウェールズ語。話者たちは、わたしたちの知らないところでこっそりと会話を楽しんでいるのかもしれない。



チェーンのスーパーマーケットの営業時間も2カ国語（カーディフ、2023年）

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2023年12月号

第47巻第12号通巻第555号 2023年12月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 島村一平 中川理 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2023年
12月号

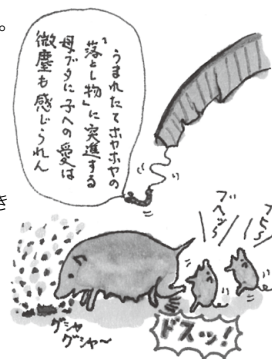
編集後記

ふなひきたけお
船曳建夫先生には大学院生時代にゼミでお世話になった。テーマは「身体」だった。扱った文献はたいがいわたしの理解を超えていて、身体という目に見えて明らかなモノについて、なぜ学者たちはかくも観念的に論じたがるのだろうか、と驚きの目を瞠り、場違いな居心地悪さに「寝落ち」することもあった。

20年あまり経って上梓した拙著のテーマが、暴力と身体。執筆の際、改めてゼミの内容を振り返り、もう一度自分の不勉強と理解の浅さを恥じた。そんなデキの悪かった学生の依頼をご快諾いただけたことはうれしかった。のみならず、「若気の至り」の告白……ではなく、森での「落とし物」とトタの話に安堵した。改めてお礼とお詫びを申しあげたい。

本誌は次号からリニューアル。コーナーもすべて一新されます。これまでの応援、ありがとうございました。

本誌がいかにたくさんの人の力添えのおかげで、47年の長きにわたり刊行し続けられてきたかを痛感しています。編集長がたとえペンクラでも優秀なサポートのおかげで大丈夫だとはわかりましたが、誌面作りを楽しみながら知的で心潤う読み物をお届けしていくつもりです。引き続きどうかよろしく願いいたします。(樫永真佐夫)



次号の予告 1月号

特集「たまご」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

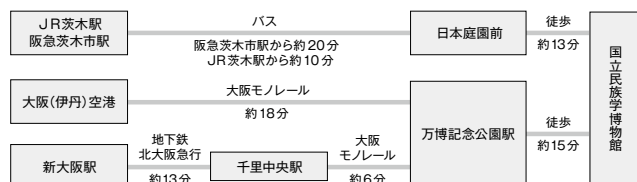
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

オリジナルグッズのご案内

みんぱくが所蔵する世界の仮面や、手話をモチーフにした
ここでしか手に入らないオリジナルグッズをご用意して、
みなさまのご来館をお待ちしております。
クリスマスの贈り物にいかがですか？

12月にご来店のみんぱく友の会会員のみなさま
WINTER SALEを開催します！

ミュージアム・ショップは2023年12月にウインターセールを
開催します。期間中、ご来館いただいたみんぱく友の会会員
のみなさまは定価から20%引きです。(一部対象外商品あり)



コットン100%

仮面づくし風呂敷

カラー：イエロー×グリーン
サイズ：48cm×48cm

定価 1,300円(税込)

人気のカラーだよ！



仮面Tシャツ

みんぱくが収蔵する世界の仮面を
デザインしたTシャツです。

カラー：ブラック
サイズ：S、M、L、XL

定価 3,300円(税込)



仮面づくし手拭い

カラー：ブルー×オレンジ
サイズ：36cm×90cm

定価 1,280円(税込)

ちいさく折り
たためます



エコバッグ

さまざまな手話言語の「ありがとう」。

カラー：ネイビー

サイズ：38.5cm×41.5cm(ハンドル含まず)

定価 500円(税込)

おでかけやお散歩
のお供に！



ウォーターボトル

数字1～10の手話をデザインした
軽くて小さな水筒です。

カラー：ネイビー
サイズ：高さ131mm×直径45mm
重さ：115g(本体のみ)
容量：120ml 保温保冷対応

定価 2,300円(税込)



手話Tシャツ

数字の1～10を手話でデザイン
したTシャツです。

カラー：デニム
サイズ：S、M、L、XL

定価 2,700円(税込)

オンラインショップ「World Wide Bazaar」では、Amazon Pay(アマゾンペイ)が使えます。

ただし、国立民族学博物館友の会会員の方の会員割引につきましては、Amazon Pay をご利用の場合は適用できませんので、あらかじめご了承ください。友の会会員割引の適用を希望の場合は、会員番号をお知らせいただくとともに、お支払い方法を郵便振替・銀行振込を選択して、お申し込みください。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ E-mail shop@senri-f.or.jp 水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」 <https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ